

愛知教育博物館関係史料の紹介と解説（その2） —当時の新聞記事に見るその足跡—

Documents concerning the “Aichi Kyoiku Hakubutsukan” (Aichi Natural History Museum for Pupils), as a short-lived private trial in Nagoya towards the end of the 19th century Part 2 — Newspaper articles

蟹江和子 (KANIE Kazuko)¹⁾・西川輝昭 (NISHIKAWA Teruaki)²⁾

1) 〒464-0004 名古屋市千種区京命2丁目18番6号
2-18-6, Kyomei, Chikusa-ku, Nagoya 464-0004, Japan

2) 名古屋大学博物館
The Nagoya University Museum, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan

はじめに

愛知教育博物館は、今から100年以上前、名古屋大学の前身校である愛知医学校の解剖学者奈良坂源一郎が主宰する浪越（なごや）博物会を母体に、児童生徒に対する実物教育を主目的として創設された、私立の自然史博物館である。この博物館の事業は全国に先駆けた画期的な試みとして高く評価されるべきものであるにもかかわらず、その調査研究はまだ端緒的と言わざるを得ない（西川，2005）。

愛知教育博物館に関する研究進展のための史料整備の第2報として、同博物館設立前後に名古屋で発行された新聞記事を調査した結果をここに報告する。名古屋市鶴舞中央図書館で公開している新聞資料（マイクロフィルム）を閲覧したものである。なお、愛知教育博物館関連の新聞記事でこれまでに出版物で紹介されたものは、管見のかぎり、井上（2000）が引用する明治29（1896）年5月の『扶桑新聞』の、知多郡有松尋常高等小学校の修学旅行で愛知教育博物館に女生徒10数名が訪れた、との記事しかない。

我々の調査によって、愛知教育博物館の開館日が1892（明治25）年10月16日と初めて特定できた。これまでの知見では、愛知教育博物館の建物が名古屋市の繁華街大須七ツ寺に完成間近の1891（明治24）年10月、巨大な濃尾地震によって損害をうけ、ここから復興して開館に漕ぎつけたのは、そのおよそ約1年後と推定されていたにすぎない（西川，2005）。また、創設に向けた募金に対して、名古屋出身で当時東京在住の田中不二麿、加藤高明などの著名人が応じていたことも初めて明らかになった。さらに、“地主の依頼により移転”との怪情報（誤報）が開館直後に流されたことも判った。開館から10年後、同じ地主から立ち退きを迫られたことによって愛知教育博物館は終焉を迎えるわけだが（西川，前掲）、この怪情報はそうした暗雲の前触れであったかのかもしれない。

以下、愛知教育博物館に関連する記事を年代順に番号をつけて紹介し、最小限の注記を加える。漢字旧字体、変体仮名、漢数字はそれぞれ、当用漢字、ひらがな、算用数字に改めた。ただし人名の旧字体は原則として変更せず、虫と蟲は区別した。ふりがなは原則として省略した。新聞名は二重カッコ、見出しはカッコ、そして注記はカギカッコでそれぞれ示した。なお、将来の比較研究に備え、愛

知教育博物館と混同されがちな愛知県博物館（門前町博物館とか愛知博物館とも呼ばれた）に関する同時代の新聞記事もあわせて紹介する。

新聞記事に見る愛知教育博物館の足跡

（１）明治 19（1886）年 3 月 19 日付け『扶桑新報』，「植物学会」

当地の嘗百社員は定期に随ひ去る 13 日の第 2 土曜日を以て当区西二葉町の植物園に開会されし同会の課題は爬行動物と鉱石にて出品者坂崎氏よりは鉱石 15 種穴熊服部氏より鉱石奈良坂氏より亀石龍子〔とかけ、と振る〕 2 種蜥〔いもり、と振る〕 蝮蛇〔まむし、と振る〕 2 種守宮〔やもり、と振る〕にて本園氏よりは蜥なりしよし当日奈良阪〔ママ〕氏は爬行動物の演舌をなし蛇蛙及び石龍子類の動作理論を初め腹部の事を説かれしとぞ

〔注記：嘗百社は、幕末の尾張において伊藤圭介らが作った本草学のサークルで、吉川（1993）によれば、60 余年続いたが明治 25、6 年に自然解消したという。出品者の坂崎親成と奈良坂源一郎は愛知教育博物館創設の中心人物であるが、彼らが嘗百社員であったことはこれまで知られていなかった。〕

（２）明治 19（1886）年 3 月 19 日付け『扶桑新報』，「随意会」

去る 15 日当区中之町小塩某方に於て随意会と称し三嶋〔豪山〕大窪〔安治、昌章の長男〕久米〔安政〕小塩〔五郎〕の諸氏等相会して博物研究会を開かれしが其出品は北海の蝗陸前産の扇貝出雲産の鱗伊勢度会郡田曾浦産の縞法螺越中富山産の障子細辛〔みすみさう、と振る〕尾張知多郡豊浜村産の膝皿貝〔ひざさらくわい、と振る〕海島諸山物産誌 1 冊摂津有馬郡新湯の近傍にて得たる炭酸石等にてありたり此の会は有志者随意に出席をなし総て会名の如く万事随意たりと

〔注記：随意会は、同好の士が博物標本を持ち寄って清談したサークルで、まもなく「浪越博物会」と改称される（以下の（４）を参照）。このサークルの初年度の記録が今に残されており、それと照合すると、本記事は随意会の発会を紹介したものである。〕

（３）明治 19（1886）年 4 月 3 日付け『扶桑新報』，「随意会出品」

当区中之町小塩〔五郎〕氏方にて此頃博物研究随意会を開きし節の出品は南天部の図 40 品、鸚鵡貝、法螺貝 2 品、マイマイカブリ、ハラボテ、ハチタラシ、トラバチ、（伊勢菰野山中の産）ハナアブ、蝶、の 1 品、アラ魚、尺八虫、シリタテ虫、木瓜、4 種田螺の堅きもの〔、〕斑天牛の一種〔、〕海燕の類 18 種〔、〕金剛魚 5 種〔、〕マツカサ魚、イバラゴチ、シカク鯛、狂言袴、ヒグラシ、（養老産）カリロク、2 種イハボタン、恵那山産大小 2 種スダヤクシ、ミルクヒ、海馬等にてありしと

〔注記：第 2 回随意会の記録である。〕

（４）明治 19 年 4 月 14 日付け『扶桑新報』，「博物講究随意会」

本区中之町小塩氏方にて開かるる博物講究随意会は向後浪越博物会と改称し毎月 8 日と 23 日を定日とせられしよし 去る 8 日の出品は三島豪山氏より鯨鱈正図 11 品、桜山氏より「ヒダカ」、鶏骨の 2 種、奈良阪〔ママ〕氏より勢州二見浦産「カイバ」3 種、奥州松島産「カイバ」、相州江ノ島産「カイバ」、無人島〔小笠原諸島〕マヒノソデ貝、同所産ハゴロモ貝、志度呂産ツト貝、同所産ソデ貝、外貝品 10 有余種、イワミノ虫の図、「アメフラシ」の図、ヒトデ貝の図、ワレカラ虫の図、松井氏より蝸牛 20 種、小塩氏よりは濃州恵那山の産なるワチガイ草、紅花のイチヤク草、チクヤウ蘭の 3 種、外に知多郡採草 5 種ありといふ

又右出品中の「アメフラシ」は軟体蟲類にて知多郡の方言にては「イソツピ」と云ふ某先生の説に西洋にて「ソ〔ウの誤りか〕ミウサギ」（訳名）といふ名あるよし此者に若〔もし〕物のふれる時は

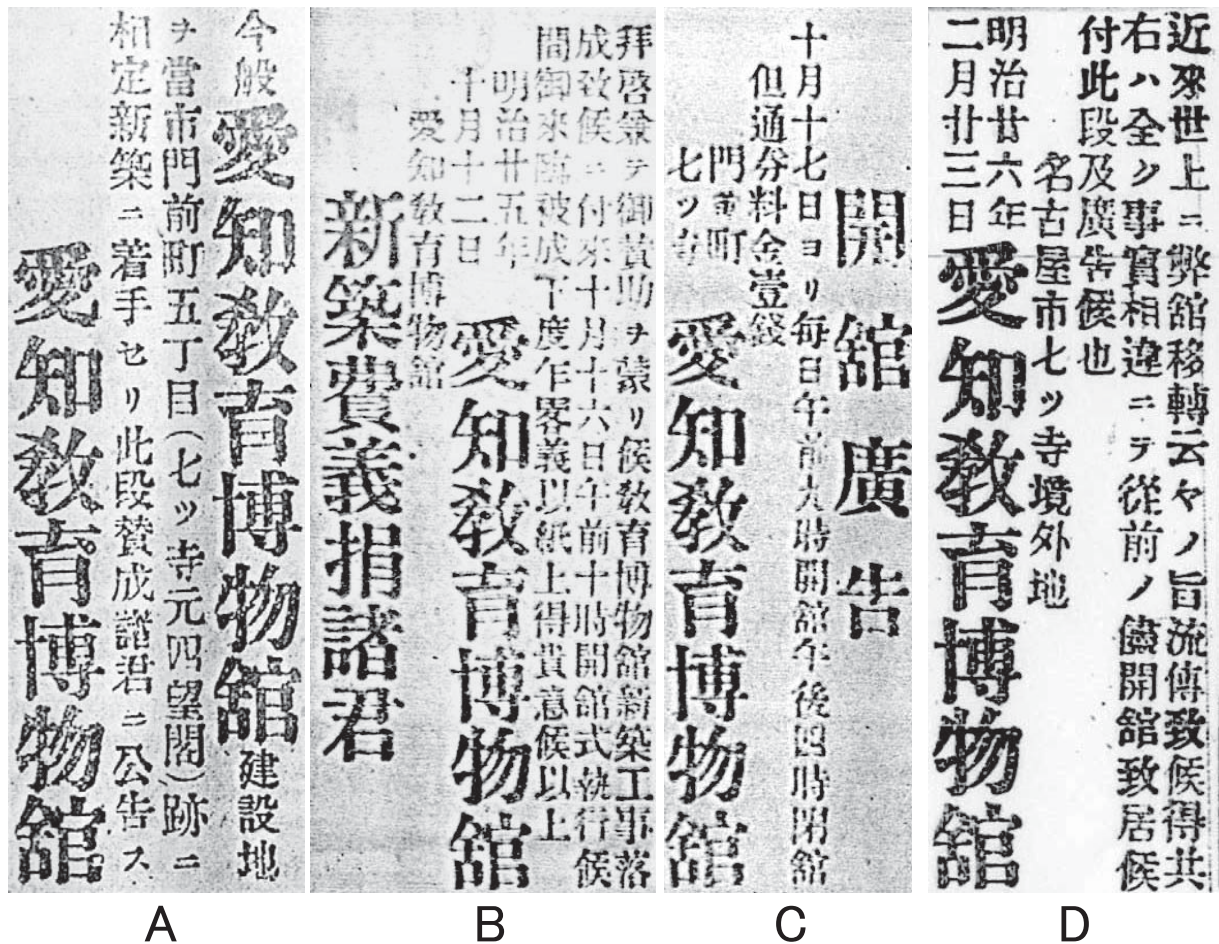


図1 愛知教育博物館関連の新聞記事 A：建設開始を宣言（記事16），B：開館式挙行（記事19），C：開館広告（記事21），D：移転の誤報への反論（記事24）

脊の下部に有る管より紫紅色の液汁を吹き出す事烏賊魚の墨を吹出すがごとしとて西洋の紅を製するに用ふるもの、よし

〔注記：随意会の名称を変更して浪越博物会となった時の模様である。上記の「アメフラシ」は、現在でも「アメフラシ」という和名で呼ばれている *Aplysia kurodai* である。「紫紅色の液汁」が「西洋の紅」の原料になるというのは誤解。〕

（5）明治19年4月27日付け『扶桑新報』，「浪越博物会」

一昨25日本区南武平町の坂崎親成宅にて浪越〔なごや、と振る〕博物会を開かれし由其の出品の数を聞〔く〕に奈良坂氏より海燕4種小塩氏よりアメマス〔、〕フサスグリ、シラクチ、イチロベコロリ、ジャニンジム、三島氏より土クラゲ、大窪氏よりクログモヒキバチ蛹、久米氏より有加利樹〔ユーカリ〕の花、桜山氏より雲母、会主より王孫草、イワボタン、井出の蛙、山鴉〔フクロウ〕鴉休鳥〔ミミズク〕、十二〔レンジャク〕紅、十二黄、雉雌雄、鶉、五位鷺の8種剥製なりしと云ふ

（6）明治20（1887）年2月10日付け『扶桑新報』，「浪越博物会」

同会は奈良阪〔ママ〕源一郎氏初同会員一同の奮発に因り近日の内当区役所議事堂に於て3日間大会を催ふし区内各小学校生徒及び有志輩に普ねく縦覧せしめんとの目下計画にて先に物品採取〔しなものととりあつかい、と振る〕の為め県下知多郡地方へ赴きたる同会の委員も既に夥多の動植物を採取して帰りたれば今回の大会は定めて盛会ならんと噂させり

[注記：この展示会は、第1回教育博会と呼ばれ、その内容は、浪越博会編『20年春2月浪越博会出品目録』に記されている.]

(7) 明治20年2月13日付け『扶桑新報』,「博会」

此程の当紙にも記載せし如く奈良坂「ママ」源一郎氏始めの発意に係る該会は弥「いよいよ」来る14[,]15の両日当区役所議事堂に開設する事に決定し学校教員生徒は勿論何人にも有志者には縦覧を許すの都合なり

(8) 明治20年2月15日付け『扶桑新報』,「博会」

予て本紙に掲載せし如く昨日は当区役所議事堂に於て同上会員の発起にて博会を開きしが普ねく縦覧を許せしにより区内各小學校生徒には何れも教員共が引纏め校名を筆太に書したる旗など押立て、參觀に出懸けたるが教員輩は勿論各男生徒は何れの学校も洋服着用の者多く最と「ママ」立派に見受けたるが其陳列の物品は例の動植物数百千種にて議事堂及び扣「ひかえ」席等へも陳列して一品毎に標札を付しありしが同所門外は為めに頗る雑沓せしと云ふ

(9) 明治20年2月16日付け『扶桑新報』,「博会へ赴る」

昨日勝間田本県知事始め岩淵書記官其他の県官には目下開会中にて一昨日の当紙にも記載したる区役所議事堂なる博会を縦覧に赴むかれたり又た右博会は猶本日も諸人へ縦覧を許さるとの事なり

[注記：この時、勝間田知事から金10円が贈られている(西川, 2005).]

(10) 明治20年2月18日付け『扶桑新報』,「博会出品総数」

此程当区役所議事堂に於て開会せし浪越博物研究会への出品総数は殆んど4900余品に及びたるが其目録は目下専ら取調中なりと云ふ

[注記：出品目録は、浪越博会編『20年春2月浪越博会出品目録』として出版.]

(11) 明治20年12月11日付け『金城新報』,「浪越博会」

当区医学校の教諭たる奈良坂源一郎氏が創立せられたる同会の秋季大会は愈「いよいよ」本日より旧尋常師範学校内に於て7日間開会の筈にて動植物鉦[物]の3種を陳列し衆人にも縦覧せしめらる、由なり

[注記：この展示会は、第2回教育博会と呼ばれている(西川, 2005).]

(12) 明治20年12月13日付け『金城新報』,「浪越博会」

同会は予て掲けたる如く近來会員も増加し追々盛大に趣く由にて既に本年2月も春季大会を開かれしが今回又第2回秋季大会を昨日より17日迄6日間七間町元師範学校内に開会し動植物鉦の3類を明細に分科を逐ひ陳列し小學校生徒をして実物経験の為め縦覧を許し後3日間は県立学校の生徒を始め其他有志の者へ縦覧を許し実物教育の裨益を助けんとするを以て県庁よりも此挙を賞し金若干円を補助せられしといふ

(13) 明治22(1889)年5月19日付け『金城新報』,「博物館借用の願書」

浪越博協会長医学士奈良坂源一郎氏は今回博物学上に関係する物品を陳列して小學生徒等の縦覧に供し其の智識開発の一端を謀らんとの計画にて当名古屋博物館の第4第5の2館を借用いたし度き旨当区役所に願ひ出でたり

[注記：この展示会は、第3回教育博会と呼ばれている。文中の「名古屋博物館」は愛知県博物館のこと。別項参照.]

(14) 明治22年5月25日付け『金城新報』,「博会の開会」

予て記載せし如く当区博物館にて開会する博会は弥々「いよいよ」本日開会する由にて向ふ7日間午前8時より午後4時迄宛無料にて縦覧を許す由又今度同会に陳列したる品種は無慮7千余種に及

び其中殊に珍奇なるもの少からず同会長奈良阪〔ママ〕源一郎氏の出品丈にて殆と3千種ありと云へり又た右の博物館は学校生徒等に取りては極めて裨益を与ふること大なるに付き名古屋区内の県立諸学校職員及び各小学校教員等何れも寄付金をなさんと頻りに尽力中なりといへり

〔注記：浪越博物館編『第3回教育博物館出品目録』によると、出品点数は動植物の総計5473種、15,500点余、入場者は9956人（うち学校生徒・職員6515人）であった。寄附は、商業学校、尋常中学校、尋常師範学校、愛知医学校、高等小学校、各小学校、および学校委員個人の計35件、金25円7銭に達した。〕

(15) 明治22年5月28日付け『金城新報』、「小学生徒の縦覧」

当区内の各小学校生徒一同は教員が引率して当時名古屋博物館内に開会中なる博物館を縦覧したり

(16) 明治23（1890）年12月13日～14日、16日～21日、24日、26日付け『新愛知』、広告欄 図1A

今般愛知教育博物館建設地ヲ当市門前町5丁目（七ッ寺元四望閣）跡ニ相定新築ニ着手セリ此段賛成諸君ニ広告ス 愛知教育博物館

〔注記：建設工事が完成間近であった翌年（1891年）10月28日、濃尾地震によって大損害をうけ、開館は1892年にもちこされた（下記参照）。位置は図2参照。〕

(17) 明治25（1892）年6月9日付け『新愛知』、「愛知教育博物館建設義捐諸氏人名」

○金2円宛 宝飯郡牛久保村岩瀬長兵衛 御津村渡邊錐造 小林傳八郎 ○金1円50銭宛 国府村平松治郎左衛門 御津村水野周次郎 山本兵三郎 ○金1円宛 桑〔1字判読不能〕村久野輝彦 赤坂村鈴木忠次郎 御油町井上與宗二 中田惣四郎 海野源右衛門 国府村平松教治 平松八平次 石川清十郎 南條春林 穂原村柳瀬達吉 豊川村中尾十蔵 牛久保村陶山嘉七郎 伊東喜一 豊秋村及部豊吉 中村實市郎 中村縣三郎 中林正次郎 大森重兵衛 佐脇村中島龍山 御油町竹内玄龍 大塚村〔1字判読不能〕石平次郎 藤田佐治平 竹内傳八郎 豊岡村宮瀬九左衛門 蒲郡町安藤伊八 静里村小田〔1字判読不能〕吉 蒲郡村畑田新作 塩澤村鈴木庸助 形原村都築源左衛門 大竹小助 国府村三輪弘忠

(18) 明治25年7月10日付け『新愛知』、「愛知教育博物館建設義捐諸氏姓名」

金30円東京市小石川区子爵田中不二麿、金15円東京市京橋区銀座1丁目11番地森竹五郎、金15円同市麴町区内幸町水野遵、金15円同市神田区駿河台鈴木町加藤高明、金15円同市小石川区金富町45番地永井久一郎、金15円同区原町25番地野呂景義、金15円同市麴町区下六番町17番地成瀬正肥、金10円同市神田区松枝町23番地永坂周二、金10円同市牛込区市ヶ谷田町3丁目12番地和田由舊、金10円東京市下谷区二長町1番地掘鉞之丞、金10円同市芝区濱崎町3番地中川五郎吉、金10円同市神田区北神保町18番地馬崎永徳、金10円同市本郷区西片町10番地伊勢錠五郎、金10円同市浅草区北三筋町60番地辰巳小次郎、金10円同市本郷区龍岡町5番地熊澤鏡之介、金10円同区駒込千駄木町50番地棚橋〔1字判読不能〕郎、金10円同市牛込区市ヶ谷加賀町2丁目10番地柴田承桂、金10円同市浅草区北清島町78番地下山順一郎の諸氏なり

〔注記：(17) (18) のような大口募金をはじめとした建設寄付金は合計4664円41銭に達した（西川，2005）。(18) に一覧された諸氏のうち、以下に言及するのはいずれも名古屋ないしその周辺出身の著名人である。田中不二麿は文部大輔として学制頒布やその後の文教政策を担い、募金当時は枢密顧問官を勤めていた。加藤高明（後の首相）、野呂景義、および掘鉞之丞は愛知洋学校・英語学校（愛知一中・愛知県立旭丘高校の前身）の出身者である。なお、この洋学校・英語学校の外国人教師用の洋風宿舍が移築され、愛知教育博物館の「研究館」となる。成瀬正肥（まさみつ）は犬山藩最後の藩主（尾張藩の附家老）で廃藩置県後は子爵。柴田承桂は日本の薬学の先駆者だが博物学にも造

詣が深く、丹波敬三との共著『普通動物学』がある。承桂の次男雄次は化学者で、戦中戦後に名古屋帝国大学理学部長を務めた（後に東京都立大学初代学長となる）。]

(19) 明治 25 年 10 月 13 日, 14 日付け『新愛知』, 広告欄 図 1B

拝啓兼テ御賛助ヲ蒙リ候教育博物館新築工事落成致候ニ付来 10 月 16 日午前 10 時開館式執行候間御来臨被成下度乍略義以紙上得貴意候以上 明治 25 年 10 月 12 日愛知教育博物館 愛知教育博物館新築費義捐諸君

(20) 明治 25 年 10 月 19 日付け『新愛知』, 広告欄

開館式ノ節ハ御光来相成難有存候何分百事不整頓勝ニテ不敬ノ廉モ可有之尚更御案内状ノ如キモ粗漏ニ涉リ候哉モ不計此段以紙上御断リ申上候以上 25 年 10 月 16 日 愛知教育博物館

(21) 明治 25 年 10 月 19 日, 20 日付け『新愛知』, 広告欄 図 1C

開館広告 10 月 17 日ヨリ毎日午前 9 時開館午後 4 時閉館 但通券料金 1 銭 門前町七ッ寺 愛知教育博物館

[注記：入場料 1 銭は、別の記録（西川，2005）とも一致する.]

(22) 明治 26（1893）年 1 月 1 日付け『新愛知』, 「教育博物館の開館」

当市門前町七ッ寺の教育博物館は旧臘 28 日を以って閉館せしが今 1 日開館同 4 日には会員集合して研究館に於て講義始めを為す由

(23) 明治 26 年 1 月 26 日付け『新愛知』, 「教育博物館の移転協議」

昨年漸く新築の功を畢へて開館したる当市教育博物館は同地主よりの依頼に因りて他へ移転するとなり同館幹事は昨日集会して右の協議を為したりと

[注記：この記事は誤報で、以下（24）に示すような訂正広告が出た.]

(24) 明治 26 年 2 月 25 日, 26 日, 3 月 1 日～3 日付け『新愛知』, 広告欄 図 1D

近來世上ニ弊館移転云々ノ旨流伝致候得共右ハ全ク事実相違ニテ従前ノ儘開館致居候付此段及広告候也 明治 26 年 2 月 23 日 名古屋市七ッ寺境外地 愛知教育博物館

(25) 明治 26 年 4 月 1 日付け『新愛知』, 「徳川侯」

旧名古屋藩主徳川義禮侯には去 29 日熱田社参の帰途午後 4 時愛知教育博物館へ臨まれ陳列物品を一覧されしかば会長奈良坂源一郎氏は説明ありて午後 7 時過館 [たいくわん, と振る] せられたり

(26) 明治 26 年 4 月 5 日付け『新愛知』, 「教育博物館の参観者」

当市七ッ寺境内教育博物館に於ける一昨 3 日 [4 月 3 日] の参観人は総て 1450 人の多きに至りたりと

(27) 明治 26 年 5 月 4 日付け『新愛知』, 「教育博物館の来観者」

当市門前町七ッ寺境内の愛知教育博物館に於ける 4 月中の来観者は 1376 人なりと

[注記：(26) と (27) の来観者数は計算が合わないが、理由は不明]

(28) 明治 26 年 10 月 12 日付け『新愛知』, 「教育博物館来観人」

当市門前町七ッ寺境内教育博物館の 9 月中来観人は 718 人なり前月に比すれば 130 余名の増加

(29) 明治 29（1896）年 5 月 3 日付け『扶桑新聞』, 「教育博物館」

4 月中の通覧人 1118 人

(30) 明治 29 年 5 月 13 日付け『扶桑新聞』, 「修学旅行」

尾張愛知郡有松尋常高等小学校男生徒数十名は去 2 日出発亀崎及び碧海郡新川を経て西尾に 1 泊翌日八面山の雲母坑を觀て岡崎に 1 泊翌日岡崎公園を遊覽して同日帰校又女生徒 10 数名は去 9 日名古屋に來泊翌 10 日両博物館等を縦覽して帰校せり

[注記：井上（2000）が引用した記事．両博物館とは愛知教育博物館と，以下で言及する愛知県博物館のこと.]

新聞記事から見た同時代の愛知県博物館

愛知教育博物館とおなじ門前町にあったことや名称が似ているために混同されやすいのが，愛知県博物館である（図2）．明治11（1878）年，門前町総見寺境内に県下の産業振興のための物産陳列館として「名古屋博物館」が創設され，本稿で言及する時期には「愛知県博物館」と改称していた．しかし，新聞記事では往々「愛知博物館」ないし「門前町博物館」として言及されている．今後の研究に備えて，この愛知県博物館に関連する新聞記事を紹介する．

*明治19（1886）年3月11日付け『扶桑新報』，「風流雅会」

当地の紳士紳商等を初め雅客にて先県令の頃初められたる松月会といふは博物館に集会し風雅の道は素より茶道から骨董等各自好む処を以て互に楽まるゝ会にして本年は未だ1回も無かりしかは昨日右松月会に「ママ」開かれしに付野村大書記官初め他の各会員出張されたりとか聞く

*明治19（1886）年3月11日付け『扶桑新報』，「博物館の出品」

最早当博物館の開場も15日よりなれば大に近寄たるが風説の如く東京博物局「ママ」の物品をも数種愈「いよいよ」よ拝借する事になりしとの事

*明治19（1886）年3月14日付け『扶桑新報』，「開館」

当区門前町の博物館は此回は目新らしき出品もある由にて明日より開館する都合なり

[注記：愛知県博物館が常時開館となったのは1890年6月からである（西川，2005）.]

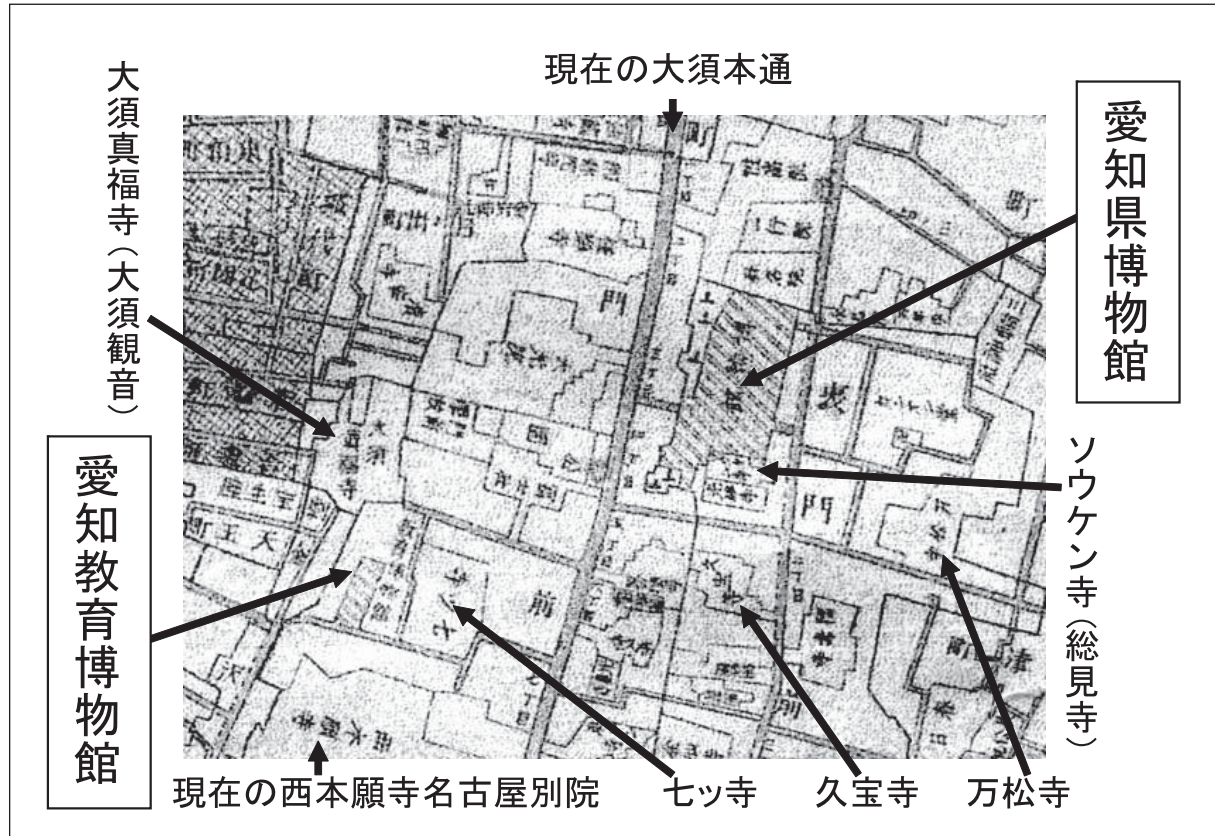


図2 「愛知県庁測量名古屋熱田実測図（明治27年12月17日発行，名古屋市鶴舞中央図書館蔵）」における愛知教育博物館と愛知県博物館の位置 図中では前者は「教育博物館」，後者は「博物館」と記されている

＊明治 19（1886）年 3 月 21 日付け『扶桑新報』，「博物館の出品」

当区門前町の博物館は去る 15 日より春季の開館あるに付東京博物館備付品の内参考の為に連〔とて〕貸与品を同館より逡送になりし分はカンガルー（剥製豪州産）1 疋，大蟾蛇（同上）1 疋，漆画額（和蘭製青貝入鍛冶工の図）1 面，漆画帖（柴田是真画）1 帖，絹織出画（三世那勃翁〔ナポレオン〕同夫人）1 枚，嵯峨天皇宸像模本 1 帖，醍醐天皇宸像模本 1 幅等なりといふ

〔注記：この「東京博物館」が，農商務省所管の「博物館」か，文部省所管の「東京教育博物館」かは不明.〕

＊明治 19（1886）年 4 月 2 日付け『扶桑新報』，「博物館」

同館の開設後雨天勝にて時候も寒冷なりしによるか縦覧人は毎日 12 〔,〕 3 人に過ぎざる位なれど去る 30 日は天気もよし殊に天満宮の祭礼にて雑踏を極めし余波の及ぶ所か当日は格別の縦覧人にて 800 有余名もありしと云う

又 同博物館に於て来る 4 月 11 日明清楽の合奏あり其の曲名は平板調〔以下省略〕

＊明治 19（1886）年 4 月 2 日付け『扶桑新報』，「名古屋熱田実測図」

当区博物館品評所へ昨日より出品になりし当区及び熱田実測図は 6 尺四方 1 葉の者にて銅板も及ばざる美麗なる出来なりと其は主任太田正八氏及び数名の手に成しものにて一昨 17 年業を起し其謄写には西村繁次郎，大崎保之助，矮竹玉三郎，太田昌，楠増吉，澤田一昌等の諸氏が従事されしとかいふ

＊明治 19（1886）年 4 月 16 日付け『扶桑新報』，「当博物館撮図貴紳の許に達す」

博物館中の猿面の茶室は有名なるより去る頃図取を東京の或る紳士より齋藤實堯氏が許へ依頼になり其際雛形を拵らへ送付せられし以来華族方の喝采する処となり現今は伏見宮様の邸にありしが此節東京にて新営する事になりしと

＊明治 20（1887）年 2 月 3 日付け『扶桑新報』，「定期博物会」

来る 5 日当区門前町博物館に於て同会を開かる、由にて其の課題は禽鳥類非金属磁類等なり

＊明治 23（1890）年 11 月 26 日付け『新愛知』，「帝国議会開院式祝典準備・祝宴場は博物館」

当市若宮社内に於て催すべき筈なりし帝国議会開院式祝賀大宴会が都合に依て更に門前町博物館と定められたり依て同館内に演舞室を新設し之に種々の装飾をなし其他掛茶屋等を新設する筈なりといふ

＊明治 23 年 12 月 2 日付け『新愛知』，「博物館祝宴会の模様」

去 29 日帝国議会開院式を祝さん為当市博物館に開きたる祝宴会の模様を略記せんに〔以下省略〕

＊明治 23 年 12 月 18 日付け『新愛知』，「博物館」

門前町博物館は昨日の三次会にて売品館を設くる事及び 24 年度に於ても常開館となすに議決せり

＊明治 24（1891）年 10 月 22 日付け『新愛知』，「博物館の新築」

当市博物館は常開館となりし以来他府県人の参観人も日々に増加し将来益々繁昌するにぞ此際商品館を側〔わき，と振る〕に移しその迹へ美術館一棟を新築せるの計画なりと而して右の新築館は赤煉瓦二階造りとなし 100 坪以上のものにて費用 1 万 2000 円の見積りなり本年通常県会には右原案を提出する筈なりと云ふ

＊明治 24 年 10 月 27 日付け『新愛知』，「絵画揮毫人名」

門前町博物館品評所に於て一昨日より開きし同好社員の催しなる絵画展覧会及び研究揮毫人名の日割は，（25 日 30 日）道恭，杏齋，介堂，翠雲，春齋，仙草，雨艇，百雲，退舟，石晃（26 日 31 日）常山，白圭，硯農，小年，石仙，恭法，雲降，春溪，直溪，竹隣，春凌（27 日来月 1 日）金秋，松堂，南華，

有年，杏堂，可墨，柳南，春僊，石亭，素秋，不成（28日）石蘭，東園，哲齋，高康，有隣，玄石，曉星，石溪，湖洲，紫山，不及，（29日）

敬堂，松齋，高慶，錦岳，小櫻，梅溪，椿善，道周，雲齋，一圭等の諸氏なりと

〔注記：奈良坂源一郎も同好社の社員であった（島岡，2006）.〕

＊明治24年10月27日付け『新愛知』，「呈茶会」

門前町博物館猿面茶屋に於て武藤茂六氏（松尾流）の催しなる呈茶会は来る11月3日より3日間開会の由

＊明治25（1892）年5月27日付け『新愛知』，広告欄

来6月1日より第6館ヲ開館シ県下ノ産物ヲ陳列売却候條出品アルベシ 明治25年5月 愛知県博物館

＊明治26（1893）年1月13日付け『新愛知』，「博物館年報」

当市門前町の博物館に於ける昨25年間の観覧人員は総計4万1272人にて之を開館342日に該当すれば平均1日に120人6分余にて此通券料は412円72銭其出品せし人員は当市外〔ほか〕13郡にて179人出品個数7万5120個其内売却品数3万7625個此代金1454円92銭なり而して同年間に1個も出品せざりし箇所は海東，西，宝飯，葉栗，東，西加茂，の6郡なりしと

今度米国シカゴ大博覧会へ本県下より出品すべき諸品数多を当市門前町博物館内に陳列して来る16日より3日間広く有志公衆の観覧に供すると

＊明治26年2月15日付け『新愛知』，「博覧会出品物の縦覧」

今度米国シカゴ大博覧会へ本県下より出品すべき諸品数多を当市門前町博物館内に陳列して来る16日より3日間広く有志公衆の観覧に供すると云ふ

＊明治26年2月17日付け『新愛知』，「出品物参観日延」

閣龍〔ころむぶす，と振る〕世界博覧会出品物を当市博物館に於て公衆の参観に供するは16日より18日までの筈なりしが更に19日まで延長せり19日は日曜日にもあれば定めて続々参観に出かけるならん

＊明治26年2月17日付け『新愛知』，「生徒は無料」

別項にも記する博物館に於て本日より公衆に縦覧を許す世界博覧会出品物の参観は当市商業学校を始め各小学校生徒は職員付添なれ〔ママ〕ば無料にて縦覧せしむるよし

＊明治26年2月21日付け『新愛知』，「世界博覧会出品物」

本県より米国世界博覧会へ出品する美術品其他とも予期の如く当市博物館品評所に陳列し公衆の縦覧に供されたるが…〔以下省略〕

＊明治26年5月5日付け『新愛知』，「博物館へ寄付」

当市玉屋町111番戸安藤重兵衛氏の後見人安藤松太郎氏より銅七宝焼牡丹紋皿1枚（代価金30円）を昨日門前町博物館へ寄付致度旨申出願せり

＊明治29（1896）年2月5日付け『扶桑新聞』，「博物館の統計」

去月中の名古屋門前町博物館の縦覧人は2644人，物品売揚金189円81銭5厘

＊明治29年5月3日付け『扶桑新聞』，「愛知博物館」

4月中の通覧人7148人売品館売上金高384円65銭5厘

＊明治34（1901）年1月5日付け『新愛知』，「同好画会展覧会」

明6日愛知博物館内に於て愛知同好画会第1回展覧会を開会する筈なり

＊明治34年1月5日付け『新愛知』，「愛知博物館の参観人」

同館の参観人は1日366人，2日401人，3日414人昨年中同館参観人3万1832人なり
*明治34年1月6日付け『扶桑新報』，「愛知博物館参観人」
昨年12月中2624人同じく五二会の売上高285円余也又33年中の本館来館人3万3836人
*明治34年11月6日付け『新愛知』，「天長節の愛知博物館」
去3日の天長節に愛知博物館へ入場したる人員は5886人にして内優待券15人，普通券3487人，
特別券2007人，学校生徒377人にて商品売上高316円余なりしと

引用文献

井上知則（2000）第10章第4節社会教育の動向，博物館．In: “新修名古屋市史第5巻”，新修名古屋市史編集委員会編，名古屋市，p. 810.
西川輝昭（2005）愛知教育博物館関係史料の紹介と解説（その1）．名古屋大学博物館報告，**21**, 173-182.
島岡 眞（2006）奈良坂源一郎関係史料目録（一）—履歴関係資料のリスト及び解題—．名古屋大学博物館報告，**22**, 249-266.
吉川芳秋（1993）医学・洋学・本草学者の研究．八坂書房，東京，xii+462p.

（2006年12月10日受付）